

### 原発避難者の生活再編と地域再生(5)

——中間的総括と今後の研究課題——

○関西大学 菅磨志保

#### 1. 報告の目的

共同研究報告「原発避難者の生活再建と地域再生」の最後にあたる本報告では、まず、原発避難者に対する広域的な支援の試みを紹介した上で、一連の共同研究報告を振り返りながら、そこで取り上げられた論点を整理しつつ、調査を通じて明らかにされた原発避難者の抱える問題が、被災者の生活再建にかかわる問題を扱ってきた従来の災害復興研究の枠組みでは捉え難い特徴をもっていることを指摘する。最後に、研究方法論の観点から、本共同研究が採用してきた質的(パネル)調査という方法のもっている利点と課題を整理し、5年間の調査研究の中間的まとめを行う。

#### 2. 研究の対象と方法

本共同研究報告の(1)～(4)では、継続して同じ調査対象(個人-集団)に繰り返し、ヒアリング調査を重ねていくというデータ収集手法を採用してきた(本研究ではこれを「質的パネル調査」とした)。また、収集したデータの分析枠組みとして、避難生活において抱える問題の質的な違いに注目し、避難元-避難先という空間軸上のマトリクスを設定し、これに位置付けていく形で、各共同研究の調査対象を配置し(詳細は第1報告参照)、それぞれにおいて、個々の避難者がどのように生活資源を獲得し、生活再建を果たそうとしてきたのか、またその過程で、避難当事者(個人)と当事者が属する集団(避難元コミュニティと避難先コミュニティ)の関係性がどのように再編されてきたのかを記述・分析するという研究方法を採用してきた。そして、各共同研究者のミクロな研究をその都度共有し、これに報告者が担当した広域避難者支援に関するマクロな視点からの取り組み事例(「東日本大震災支援全国ネットワーク(JCN)」の広域避難者支援事業)の調査で得られた情報(原発避難者の生活再編過程に寄与した避難先での支援活動や支援体制)なども総合して、原発事故に伴う避難が構造的に抱える問題の把握に迫ることを試みる。

#### 3. 結果と考察

原発避難者は様々な利害関係の対立軸によって分断され、そのことが生活資源の獲得を阻害する要因として働いてきた。加えて、従来の災害復興過程では、被災した地域空間の修復を目的として行われる「復興事業」(公共事業)と、個人の「生活再建」を媒介する地域コミュニティ・レベルの「集会的な意思決定」の仕組みが用意され、これを足がかりにした生活資源の獲得が行われてきたが、多くの原発避難者は、地域コミュニティという手段が得られない状況に置かれ、生活再建のための課題を、個々の家庭の私的な問題として処理することが求められてきた。さらに生活の最小単位となる家族の中にも分断線が存在し、ゼロまたはマイナスからの生活再建が模索されてきた。

本共同研究では、複雑で潜在化しやすく、また従来の災害復興過程の研究枠組みでは整理できない問題を、できるだけ当事者の立場に近づき、その生活再建の過程、とりわけ再建に使われた資源とその獲得方法に注目して丹念に記録していくことを重視してきた。研究はまだ半ばであるが、現時点での到達点と今後の研究課題を示し、中間的な考察とする。

#### 文献

- 菅磨志保(2016)「災害ボランティアをめぐる課題」関西大学社会安全学部編『東日本大震災復興5年目の検証』ミネルヴァ書房。